

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ（一五）

第五四則 雲巖大悲

〔示衆〕

衆に示して云く、八面櫺櫺、十方通暢。一切処、放光動地、一切時、妙用神通。且らく道え、如何んが発現せん。

〔本則〕

挙す、雲巖、道吾に問う、大悲菩薩、許多の手眼を用いて作麼かせん。「你、恁麼に問う、箇の甚麼をか図る。」吾云く、人の夜間に背手して枕子を摸るが如し。「一上の神通、小小に同じからず。」巖云く、我れ会せり。「且らく詐って明頭なることなかれ。」吾云く、汝、作麼生か会す。「果然して放不過たり。」巖云く、徧身是れ手眼。「空穴の処なし。」吾云く、道うことは即ち大慙だ道う、即ち八成を得たり。「某甲、舌頭短し。」巖云く、師兄は作麼生。「理長ずれば即ち就く。」吾云く、

通身是れ手眼。〔隔礙の処なし。〕

今回は龍泉院観音堂の再建にちなみ、雲巖曇晟禪師とその実兄とされる道吾円智にまつわる観音の話（公案）です。この両者については、すでに第四回の「雲巖掃地」でのべましたから、ここでは伝記などの重複を避けましょう。ちなみに、『従容録』百則の中で、曇晟さまをテーマとする則是、この二つだけです。

ところで、今年の夏、わたくしは曇晟さまが道場を開いた湖南省醴陵県の雲巖寺の住僧性慧法師という方から、思いがけない手紙を受けました。それは、さいきん雲巖寺が省の重点文物単位（文化財）に指定されて、ほとんど何も遺っていなかった伽藍が復興されはじめ、まず観音堂と曇晟さまの墓塔が完成し、引きつづき大雄宝殿（本堂）の再建準備中、という内容でありました。

わたくしが一九八三年秋に雲巖寺跡を訪れた時、現地人の説明では、文革で破壊される以前の寺には、五mもある大きな観音像をまつた観音殿がそびえていたそうです。ですから、今年まっさきに復興された観音堂は、

雲巖大悲



たとえ小規模なものであっても、この寺ではいかに重要な伽藍であるかがわかります。雲巖寺も龍泉院も、奇しくも今年は同じ観音堂の再建年だったわけです。それはともかく、曇晟さまと道吾との観音に関する問答は、こうしてみると大変意義深く感じられます。

わたくしたちが、昨年拝読した『正法眼蔵』観音の巻は、この「雲巖大悲」の問答がテーマとなっていたのは、先刻ご承知のとおりですね。以下、あらためて味わってみましょう。

まず、例によって万松の「示衆」を意識しておきます。

「観音さまは、どこからみてもすき透り、あらゆる方向にゆき亘り、どこにでも瑞祥を現わし、なすべきようにふるまわれる。このすばらしいはたらきは、どうしてできるのかいってみな。」

面白いですね。つぎに中心をなす宏智の本則です。

雲巖が兄の道吾にたずねた。

「観音さんのあまたの手や眼は、いったいどうするのですか。」道吾「人が夜寝ながら、はずされた枕をちゃんと手で探すようなもの。」
「わかりました。」道吾「どんなふうにわかったの。」雲巖「身体中

がみな手や眼である。」道吾「なるほど、でもまだそれでは八分通りの答えだぞ。」雲巖「では兄さんはどうなのですか。」道吾「全身が手や眼だ。」

この問答は、字面のやさしさとは裏腹に、やはり深い意味がこめられています。常識的には、千手観音や十一面観音など、たくさんの手や眼をもった観音さまは、いうまでもなく大慈悲をたれたまうための象徴であります。ところが、禅の立場は生仏一如といい、自分が仏であることを体得し、そのすばらしい仏としての自覚に生きることにありますから、観音さんも



雲巖寺の古碑銘

単に拝む対象としての仏にはしておきません。自分が観音であり、観音としての自分を発揮するように目指すところに本領があります。

この問答でも、道吾が夜間に枕を無心に手さぐり当てるのを観音の妙用自在なはたらき、とみるところが重要です。こんな卑近な日常の動作の中に、じつは人間が仏としてのはたらきを現わしているという自覚です。万松はこれを神通とさえ表現していますね。それを雲巖さまが会得し、さらに道吾とともに、この身体すべてが観音の手や眼であることを確認し合っています。

ですから、道元禅師は「観音」の巻で、この両者の観音問答は古今東西観音に関する言葉の中で最高のものだ、と讃嘆しているのです。「いま仏法西来よりこのかた、仏祖おほく観音を道取すといへども、雲巖・道吾におよばざるゆゑに、ひとりこの観音を道取す」と。それはまた、観音を真に観音ならしめている、ともいっています。

全身が手や眼だという自覚は、すばらしいことですね。

ただし、誤解してはいけません。全身が手や眼だといっても、それは常に感覚器官を最高度にはたらかせるという意味ではありません。

感覚も心のはたらきですが、その中味や内容が大切です。感覚の仕方が重要であります。

たとえば、目についていえば、一つのものだけに目をうばわれると、すべてが見えなくなりそうです。車の運転が良い例で、すべてのものに目を向け、注意をはらわなければなりません。それには一つのものだけを注視してはならないのは、ドライバーのすべてが肯定するところでしょう。

沢庵は『不動智神妙録』の中で、一に心をとどめると全部ダメになる道理をくり返し説き、観音について、「観音とて身一つに千の手が何しに有るべく候。不動智が開け候へば、身に手が千有りても皆用に立つと云ふ事を人に示さんが為に作りたる容にて候。」と面白い説明をしています。「不動智が開く」とは、とらわれのない心になることです。こうした心になれば、全身が観音さんの眼や手としてのはたらきができるということです。

とらわれなき心——、わたくしたちにとっては、やはり生涯のテーマですね。しかし、先聖も古仏もみな苦労したテーマなのですから、精進あるのみです。それは坐禅のところでなくて何でしょうか。

天童寺を訪ねて

柏市 五十嵐 嗣 郎

「牛に引かれて善光寺」は昔のお婆さんが仏縁に入った話ですが、この度は、「クロネコに引かれて天童寺」への快適な、意義深い旅をすることができました。（クロネコとはヤマト運輸トラベルの神宮寺さんという中国には精通したベテランの添乗員さんです）

月例の参禅会で、椎名老師より折に触れ、中国佛跡を訪ねられたお話しを伺い、私も一度は行ってみたい、できれば天童山や阿育王



天童寺の仏殿

寺など道元禪師と縁の深い寺々を訪ねてみたいと思っていました。その機会が意外にも早くやって来たのです。今年の二月か三月の参禅会で、椎名老師より曹洞宗千葉県事務所主催による第四次中国佛教史蹟参観訪中団の企画を伺い一も二もなく参加を申し込みました。

上海の静安寺から杭州の靈隠寺まで全部で一二ヶ寺を参観しましたが、ハイライトはやはり天童寺の参観と朝課への随喜でした。

天童寺は浙江省の寧波地区にあります。寧波は道元禪師が入宋した港ですが、現在も一二〇万人の港町であり、工業都市です。この地区には天童寺・阿育王寺を始め多くの寺院がありますが、残念なことに曹洞宗のお寺は、今は一つもないとのことでした。

寧波に入港後、阿育王寺を参拝し、バスで天童寺へ向います。道路は舗装され快適なバスの旅でした。（椎名老師のお話しでは、以前は未舗装でひどい道だったそうですが、寧波と阿育王寺と天童寺が出資し、立派な道になりました）

万松関に入ると、両側は宋や明

の時代に植えられた松並木が続きます。途中、第一・第二山門を過ぎ、放生池のある第三の山門でバスを降り、修祥和尚の出迎えを受けました。

早速、方丈応接間に案内され、修祥和尚より「ここは皆さんの実家のようなもの、ゆっくりくつろいで下さい」との歓迎の挨拶を受けると共に、文革による伽藍の破壊を受け、その後の復興状況等についての説明がありました。

龍井茶を頂きながら室内を見わたすと、「明公主天童佛門同灰」「陽光秋長庚禪雲普照」の額が柱にかかっていました。

夜半、仏法僧の声で何度か目を覚ましなが、翌朝三時半起床、朝課の行われる仏殿へ向う途中、道元禪師が妙高台へ向う時に御覧になったのと同じ月が中天に白く光っていました。

仏殿には、既に百名を越える僧と多くの信者で一杯でしたが、修祥和尚の図らいで高い席に列席させていただきました。読経の流れの中、道元禪師とは七五〇年の時間差はあるものの、同じ地点に立ち、同じような朝課に参加していると思うと、感激はひとしおのものがありました。

修祥和尚を先頭に全員で仏殿内

阿育王寺天王殿



を拝廻した後、三拝して法要が行われ、最後に千葉県訪中団だけによる法要も行われました。

朝課の後、諸堂参観。途中、永平寺より贈られた道元禪師像と碑を参観し、坐禅堂では一〇分間ほど坐る貴重な経験も出来ました。

この日も天候は素晴らしく、堂内の高台からは重層に積りあった大伽藍の豊が朝陽を受け黒々と輝いている様がよく見わたせ、圧倒される思いでした。

今回の旅は、道元禪師が中国へ正伝の仏法を求めに正師を尋ね歩いた足跡を辿り、往時を偲ぶものですが、道元禪師も天童山で如浄禪師に出合うまでは、どこかに焦りみたいなものを感じていたのではないかとフト思いました。道元禪師と如浄禪師とを結ぶ仏縁があればこそ、今日我々も坐禅の功德に預かることができると思うと、天童山が非常に有難い聖地に見えて来ました。

文革で破壊された寺院も次々と再建されている様子が、今回の旅でよく分りました。今、中国では経済開放政策で、経済的には豊かになって来ていますが、宗教の自由化で心の方も豊かになって来ているように見受けられます。ただ再建された寺院はどれも美しく荘厳ですが、伽藍が皆同じ印象です。各寺院の伝統や宗派により、何か特徴や個性的なものをもっとあってもよいのではないかと思われしました。今後の中国仏教界の発展を願ひ、今回お世話いただいた永明寺の栗原団長以下千葉県宗務所の方々にお礼を述べると共に、次回は龍泉院参禅会の主催で、皆様方とご一緒に是非もう一度訪れることが出来れば幸いと思います。

大本山総持寺での一泊参禅

回を数え七回目を迎えた今年の一泊参禅会は、椎名老師、小畑様のご努力のお陰様で、積年の夢で
 ありました大本山総持寺にて実施することができました。
 六月六日(土)〜七日(日)の



椎名 老師
 ▲参加者▼
 小畑 節朗
 五十嵐 嗣郎
 井野輪 進
 石井 つや
 今泉 章利
 今泉 房子
 海庵 正俊
 川島 勇治
 栗田 章
 佐藤 初恵
 四宮 清二
 下村 忠男
 杉浦 上太郎
 添田 昌弘
 武田 博志
 寺田 哲朗
 徳山 浩
 中嶋 宏誠
 西田 貢
 政安 裕良
 宮田 哲男
 安本 小太郎
 吉岡 誠義
 (二三名)

両日、梅雨の季節に稀な晴天のもと求道心一杯の、椎名老師他二三名の方々が集われました。

さすが大本山らしい荘厳な雰囲気、気を湛えた総持寺。これ以上の修行の場はありません。

一般参禅者が修行させていたただく坐禅堂にしても然り。開祖道元禪師からの悠久の禅の鼓動が脈々と流れていることを実感し、思わず身も心も引き締まる思い一杯でありました。

この一泊参禅会は、次の差定のもとに行われました。

六月六日
 上山 午後二時
 オリエンテーション
 坐禅 午後二時三〇分
 薬石準備 午後四時三〇分
 薬石 午後五時
 法話 午後六時
 夜坐 午後七時
 明朝説明 午後八時三〇分
 開枕 午後九時
 六月七日
 振鈴 午前四時
 暁天 午前四時三〇分
 朝課 午前五時三〇分
 小食 午前七時
 作務 午前七時三〇分

禅 講 午前九時

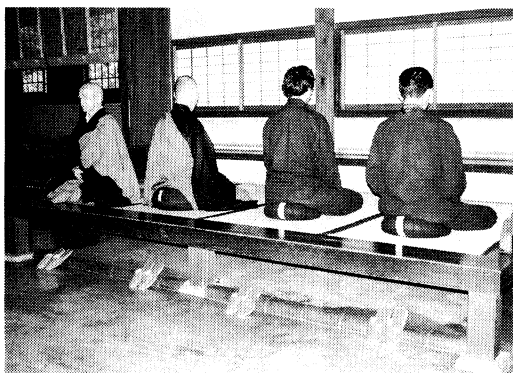
椎名 老師

坐 禅 午前十時

下山準備 午前十一時三〇分
下山 正午

第一日目の総持寺の東老師の話は、「坐禅の心構え」についてでした。

ヨーロッパへキリスト教（カソリック）との交流で行かれた折、ある祈る人の言葉「私は神に祈っているのではなく、神が私のために祈ってくれている声を聞いている」に疑問を感じられるが、やがて道元禅師のお言葉にも、全身を仏に投げかけ、自分の心・言葉を



総持寺の坐禅堂で

仏の心に投げ入れるといったの間にか仏のやる通りのことを行っているという意味のものがあつて、思い出され、宗教全体の共通点を見出された辺りや、西郷隆盛の言葉「いのちも名誉も金もいらぬ、たゞ人を愛するのみ」という挿話は大変興味深いお話しでした。

正法眼蔵の引用も多数され、自由な心で坐禅をすることの大切さを格調高くご教示賜りました。

第二日目の椎名老師の禅講は、昨年の常真寺一泊参禅会時に引続き『典座教訓』でした。

「六味精しからず、三徳給わらざるは、典座の衆に奉ずる所以に非ず」。料理の味付け、調理法について等、その他厳しい典座の作法規範についてご教示いただきました。

二日目の正午に下山。同寺には故石原裕次郎の墓所もあつて、早速墓参される方もいらつしやいました。東老師や修行僧の方と共に記念写真撮影。後、鶴見駅近くで昼食をいただき散会となりました。待望の大本山総持寺で一泊参禅会が実現できましたことを、改めて椎名老師、幹事の小林様、ならびに年番幹事の徳山様、武田様と一緒に同心よりお礼申し上げます。

清水利一さんを偲ぶ

佐倉市 宮原 惇

早いもので、清水利一さんが他

ました。

界されて四ヶ月が過ぎました。私が清水さんに最後にお会いしたのは、亡くなる五日前でした。その時も少し苦しうにされておりましたが、まさかこんなに早く別れが来るとは思っておりませんでした。亡くなる前日、たまたまその日が土曜日でしたので、お見舞いに行こうかと思いましたが、五日前にお会いした時に苦しうにされていたので、もう少し病状が安定してからにしようと思わなかったことが、今でも心残りや悔まれてなりません。

私が龍泉院の参禅会に参加させて戴くようになりましたのは、清水さんの紹介によるものでした。坐禅について真面目に考えたこともなく、好奇心によるものでしたから、直ぐに飽きてやめてしまふのではないかと、迷っておりました。その時、清水さんが、「そんな窮屈に考えることないよ。この坐禅会は、お互いのことを干渉しないから、イヤになれば行かなければいいんだよ。一度どんなものか来てみたら……」の言葉が縁で、参加させて戴くようになり

ました。

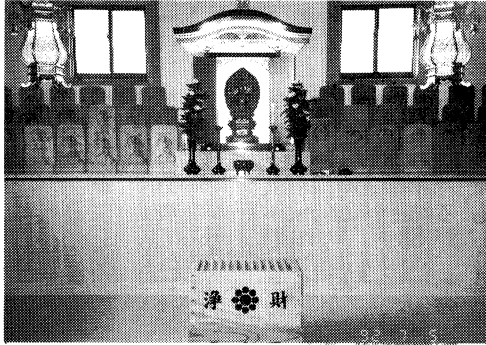
清水さんは、大変な読書家で哲学にも造詣が深く、真剣に坐禅に取り組んでおられました。数年前、羽黒山大雄寺へ一泊参禅会に行つた時も、大雄寺に行く当日に海外出張から帰られ、成田空港からそのまま参禅会のバスに直行されたこともありました。

平成二年一〇月に肺癌の手術を受けられましたが、その翌月の参禅会には、まだ入院中のところを外泊許可を貰って参加されました。未だ傷が痛むし苦しいと言っておられたので、「そんな無理して出ることないでしょう。」と、私が言ったら、「イヤー、今は坐禅が僕の楽しみなんだ。」と言われたのが記憶に残っております。

手術後も何度か入院を繰り返される中で、会社の方も責任の重い立場におられたので、病院から痛み止めを打ちながら会社に出かけるようなこともありました。

壮絶な病気との闘いをされ、男の死に様をみせて戴きました。清水さんご自身も、不治の病であることは先刻承知されておられ、「僕のこれからの人生は、自未得

安置された百観音



観音堂全景

祝落慶

観音堂

度先度他の心だよ。」と、椎名老師のご講義された正法眼蔵発菩提心の言葉を引用され、それを実践されておりました。私がいろいろと個人的な事で相談に行っても、ご自分の痛みも不治の病の不安も抑えて、真剣に話を聞いて励まして下さいました。

清水さんご遺族に深く感謝するとともに、自分のことしか考えない私の身勝手さに、自責の念を感じています。

ご生前に戴いた本、まだ読ますに本箱に置いたままになっているものもありますが、形見と思って読み返したいと思います。

清水さん、長い間いろいろお世話になりました。お疲れだったでしょう、ゆっくりとお眠り下さい。

合掌



龍泉院「おせがき」 大法要の一日寺男

柏市 今泉 章利

二年前の平成二年に、生まれて初めて坐禅をした私が、今年、龍泉院「おせがき」大法要のお手伝いをさせて頂くことになった。

そもそもお寺は昔から大の苦手という、とんでもない心得違いの私が、妻に首を引かれて、龍泉院に通わせていただいて、早や三年目に入っている。いつも何となく、御老師にも皆様にも、迷惑をかけている気がするので、何か埋め合わせを思っていた処、御老師が「おせがき」裏方の手伝いをして貰えないか、これは力仕事ですーとのお話があったので、これならば我が出番と、喜んで妻と参加させて頂いた。以下その概要を謹んで報告申し上げる次第。

時は八月十六日の日曜日。仕事の内容は、本堂の飾り付け、お茶、仕出し弁当、後片付けなどで、参加された方は九名。男性は、武田、杉浦、小沼、添田の各氏と不肖、女性陣は、石井、根岸、浅野の各氏と荊妻という顔触れであった。午前九時、龍泉院に到着すると、既に、武田、杉浦、添田さん達が来ておられる。車が沢山来るので、

我々の車は、庫裏の脇から本堂の前に駐車。早速、男性陣は本堂の力仕事、女性陣は水屋でお茶出しの準備。本堂の仕事は、まず、青黄赤白黒(せい・おう・しゃく・びやく・こく)の五色幕を本堂の内側に張ることで、高さが四メートル位あるので脚立によじ登る。引っ掛ける紐の弛み具合の調整が難しいが、杉浦さんの指揮で、見事に処理。流石でした。

施架という棚を本堂の御本尊と対応させるように配置し、時代を感じさせる御位牌を沢山並べる。少々重いものもあり、腰に注意。何やら有り難い短冊の様な施餓鬼幡を本堂の入口から吊り下げ終わる頃、女性陣からカルピスの差し入れ。小休止。御老師が盆の檀家周りの話を下さる。エネルギーシユな御老師のお話を聞きながら、手賀沼からの風が心地好い。

小沼さんが、裏の林から竹を切ってきて、枝を払っていたら、石井さんが、竹の枝を払う時は、鉈の刃の処ではなくて背中で払うものだーとの解説アリ。小沼さん、小生も納得することしきり。何百枚

あるのだろうか、卒塔婆を、新盆とそれ以外のものを左右に分けて、御本尊に対応するように立て掛ける。本堂の柱の間にロープを張るのは、元ボークスカウトの私の仕事と張り切ったものの、つるつるの太い柱と格闘すること約十分、御老師のアドバイスで漸く張れた。これに卒塔婆を大量に立て掛けるのだから、若し、倒れでもしたら一大事。結局、大丈夫だったが、心配だった。

座蒲団を敷き、中野東禅老師の説教台をセットして、午前の最後の仕事は、老師の説教の資料、お経の葉、お供物と卒塔婆の配布の分担、要領の確認、クレーラの効いた水屋で昼食を頂きながら、いよいよ一時からの始まりを待つ。続々と、沢山の檀家の方の到着。中野老師や手伝いの大洞院の木村老師など顔見知りの和尚様達も到着。一時から中野東禅老師の説教、二時から特別施餓鬼・新盆合同施餓鬼、三時から山門施餓鬼が滞りなく行われた。誠に、不謹慎なる感想を二、三。

気温が三十度を越え、本堂の中は蒸風呂。外で下足番の私達のところは涼しい風が吹いていたのに、中でよく誰も倒れないものだ。檀家の一人に、お説教が長いと小言

を言われる。恐れ多くも御老師に成り代わり、承った次第。

流石のお坊様たちも、些かお疲れの顔になってきた四時近く、新盆以外の方の卒塔婆を書かれた何百名かのお名前を、椎名御老師が、片端から、物凄いスピードで読み上げられた。始めは、「大悲心陀羅尼」のお経かと思ったが、とてもない。あんなに早口の日本語は生まれて初めて聞きました。後で、御老師にお伺いしたら、昔はもっと早かったとのこと。黒柳徹子もかなうまい。

「おせがき」大法要が無事に終わると、檀家の方は、卒塔婆をめいめい取って、お墓参りをする。ところが、この卒塔婆採しが大変。本堂の周りに立て掛けた自分の家の卒塔婆をとるのが、何百枚もあるから捜し当てるのが一苦労。恰もトランプの神経衰弱の如し。

車が出ないとかひとしきりあって、潮が引くように皆さんが帰られ、片付けと掃除が終わわり、檀家総代の方達と挨拶をしたのが六時頃。風が、夕方の風になり、御老師から「本当に御苦労様」とのお言葉とお供物等を頂きましたが、小生には、御老師や奥様が、どれほど一生懸命に、心を込めてこの法要を営まれたかが、痛いほどに

理解出来、又一つ世界が見えたような気がして、本当に有り難い事だったと御老師様と皆様に衷心より深謝、合掌申し上げながら、ハンドルを握りわが家へ向かったのでした。

インド便り

|| 藤原公様から椎名老師宛の手紙より ||

八月五日 椎名宏雄様

拝啓 その後御無沙汰いたしました

した。皆様にはお変わりなくご精進のこととご拝察致しております。私もこの地に慣れ、また雨季であっても快適な日々を過ごしています。先月の終りに、お釈迦様の生地、成道の地に近いウエストベンガルに旅行しました。以下は家族に宛てた手紙です。

七月一九日にマイソール出発。

二〇日カルカッタ着。こゝから西に向かえば仏陀の成道の地ボードガヤに行けます。

二二日迄研究所訪問のため移動。研究所にて会議の後、二五日第二の目的へ向うべくカルボンに入る。こゝはヒマラヤ山系の山の中です。自然条件の厳しいヒマラヤ山腹で生きることにぎりぎりの生活に甘

(尚、当日、参禅会代表幹事の高間様に初めてお目にかかり、日頃の御礼と御挨拶申し上げました)



んじている人々に、仏教で言う「無」を感じました。

二六日、ヒマラヤ登山の基地でもあるダージリンに向う。こゝのダージリン茶は良質で有名との由。ヒマラヤ連峰の大雪山を初めて見た感激を素直に伝えることができないのが残念です。仏陀釈尊はヒマラヤ連峰を直視しながら思索されたのではないかと思います。体験なき思索は空想であり、その知識は単なる物知りです。インド哲学、宇宙感の源泉はこの現実のヒマラヤであったかも知れないと思います。

今回の一〇日間の旅行は強行軍で疲れました。今月一八日からタイへ向います。それでは参禅会の皆様にもよろしくお伝えください。

(抄録)

龍泉院参禅会簡介

一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）

一、坐禅 止 静 鐘 三声 坐禅

経行 鐘 二声 経行

放 禅 鐘 一声 放禅

一、講義 木版三通 開経偈を唱えて「正法眼蔵」の提唱を聞く

講師 龍泉院住職 椎名宏雄老師

平成四年九月より「古佛心」の巻を提唱

一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談

正午解散

一、参加資格 年齢、性別を問わずどなたでも参加できます。

一、会費 無料

一、成道会坐禅

月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二

日曜。（本年は二月六日）

釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴

聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雑記

〔参禅会記録〕（ ） 中は座談の司会者。

・四月二六日 三八名

（宮田哲男氏）

裏山にて恒例の筍掘り。

・五月二四日 三四名

（添田昌弘氏）

椎名老師より、全員坐法指導を受く。脚下照顔。

・六月二八日 三四名

（武田博志氏）

・六月六日、七日

一泊参禅会 二三名

於 横浜市鶴見 大本山総持寺

幹事 徳山 浩氏

” 武田 博志氏

・七月五日

天徳山龍泉院の大悲殿、観音堂落慶開眼法要が挙行され、参禅会を代表して七名が奉祝参列。

・七月二六日 三〇名

（吉岡誠義氏）

・八月一六日

龍泉院施餓鬼会に参禅会を代表して九名が奉仕。

法話 中野 東禅老師

・八月二三日 二九名

（遠藤重清氏）

・九月二七日 二六名

（宮田哲男氏）

▼今年も四月の参禅会終了後、龍泉院裏山の筍を有難く頂戴いたしました。

▼龍泉院の付属堂宇観音堂（大悲殿）が、堂々の改築をみ、七月五日、落慶法要式が挙行されました。新たな観音堂内には、如意輪観音像を中心に、百観音を含め計一五体の石仏が安置されております。精神的に益々荒廃していく現代、この百観音様がまた新たな慈悲の光を投げかけてくださるでありましょう。

また、七月より坐禅後の講話と座談は、これまた新築された回廊を通して、新しい観音堂の広間で行われようになりました。新しい木の香、初心に帰る香り。感謝と共に、更なる精進を誓う。

▼五月、会友の清水利一様が逝去されました。赤心の求道心は、全く頭の下がる思いで一杯です。心より冥福をお祈りいたします。

▼四月、徳山様の御奥様が逝去されました。心よりお悔み申し上げます。

▼五月一六、二三日迄曹洞宗千葉県事務所主催による「第四次中国佛教史蹟参観訪中団」に当参禅会から椎名老師、五十嵐、武田の各氏が参加されました。

（杉風記）